

立山

チョウノスケソウ

立山はわが国で最も早く早く開かれた山の一つである。と書出して始まる日本百名山、立山の項。かつては修験道の山として登られたが、立山黒部アルペンルートが開かれてからは、ハイヒールで室堂まで来る事が出来る観光登山の山となった。

しかし、室堂を起点として奥大日岳に向えば、まるでヨーロッパアルプス並の壮大な山岳風景を望むことができる。又頂上に立てば、岩山の剣岳が眼前

に聳える雄大な山岳風景がパノラマ的に広がる。観光化しているとはいえ、登山家にとつては魅力的な山なのである。深田久弥も立山に魅せられた一人で、その頂を一番多く踏んだ山の一つと書き記している。

高山植物も又魅力の一つである。高原バスから降りてすぐ、花壇に咲くように高山植物を観察できる場所等、そうざらにはない。そして、特筆すべきは、チョウノスケソウという個人名が冠された花の発見が立

山であったと言う事。発見者は須川長之助。江戸時代末期に岩手県で生まれ、明治初年頃にロシアの植物学者マキシモヴツチの従者として、日本の植物採集に携わり、彼が帰国後も全国を旅して、植物標本をロシアに送り続けた。

明治三二年、立山に登り、一ノ越辺りで発見。後に牧野富太郎が、彼の功績を讃え、和名をチョウノスケソウとしたのである。

立山のチョウノスケソウは、

温暖化のせいかわ、近年個体数を激減している。しかも、尾根のガレ場であり、雪解け間もない頃、強風で完全に花びらの揃った花はまずない。何度目かの取材で、たった一輪、岩の陰で咲き揃ったチョウノスケソウを発見した。

